

童謡音楽の将来

福田 童謡音楽の将来についていかがお考えですか。

安尾 子どもは時代精神を吸収しているわけですから、時代によって変わるのは当然だと思いますが、必ずしもよい方向に変わっているとはいえないと思います。テレビやアニメの音楽を制作する側の売ろう売ろうとする商魂たくましが、子どもにおもしろいと思わせるかも知れないけれど、そういう曲は流行に終わって、残っていかないんですよ。曲のおもしろさと教育的な配慮のバランス、息の長い童謡はどこかバランスがとれているものです。

人格形成という教育的配慮のこもった童謡がもっと見直されていいと思いますね。もちろん時代を無視して戦前の考えや花鳥風月をおしつけるのは困りますが。

福田 渡辺先生は長い間、童謡にかかわっていらして、いかがお考えですか。

渡辺 歌詞から子どもの生活がにじみでてくるように、子どもの言葉をのせてもらいたいと思います。大人が考えて「こうしなさい」と教えるのではなくて、「いやだい」とか「けちんぼ」などの、いわゆる「悪い言葉」といわれるような言葉も含めて、子どもの生の言葉が使われていいと思うんです。それを歌うことによってなごやかになるように。人生の幅として、子どもの内面や情緒を引き出すように、メロディーにもものせることを心がけています。

私は大学生の頃にジャズをやっていたんですが、そのことが作曲の幅を広げたように思います。学校の教師をし、ベートーベンやモーツァルトばかりを勉強していたのでは、作曲の幅を広げるのはむずかしかったように思います。私の曲の中に、シンコペーションが入ったりするのはジャズの影響だと思います。もちろん、そうした技術は童謡にはふさわしくないと考える向きもあるんですが。

小野 『エーミールと探偵たち』などの本で知られるエーリヒ・ケストナーは、自分の詩を、薬のように社会に役立つものとして、「実用詩」と呼んでいます。そして、『叙情的家庭薬局』というおもしろい名の詩集を 1936 年に刊行しています。詩集をあけると、「貧乏になったら」この詩を読みなさい。「なまけぐせがついたら」そこを、というようになっています。「病気でくるしんだら」「お母さんを思い出したら」「自信がぐらついたら」というものもあります。（『夢を育てた人々』につけん教育出版社発行より）

渡辺 子どもだって、楽しいときとか、悲しいときとか、いろいろなときがあるんです。子どもの心をゆたかに育てる童謡をつくるといいと思います。私は、苦しい中で作曲し、うまくできたときの楽しさが忘れられないわけです。それが多く子どもたちに喜んでもらえれば、なおさらうれしい。

小野 子どもたちが世界の音楽にしたしむのもいいことですな。

渡辺 ああ、いいですね。聞かせてあげたいものです。世界の童謡から、いろんなものを感じとってもらいたいと思います。



NHK テレビ「なかよしリズム」より
(五十野氏提供)

小野 音楽だけでなく、ものの見方、考え方、表現の仕方など幅広く吸収してほしいですね。

渡辺 そうです、国際感覚も身につけてもらいたいと思いますからね。

小野 松谷みよ子さんの『龍の子太郎』は世界の国々で翻訳され、多くの子どもたちに読まれています。日本で生まれた童謡が世界の国の子どもたちに歌われることもすばらしいことだと思います。

福田 五十野先生はNHKの幼児音楽番組「おかあさんといっしょ」や「なかよしリズム」

などのディレクター（1960年代～70年代）としてお勤めでしたが、NHKではどんなことをなさってたんでしょうか。

五十野 私はNHKの幼児音楽番組で、やかんやなべのふた、コップなどをたたく音、紙を破く音など、いろいろな音にあわせて、子どもたちが自由に身体表現をすることを試みました。当初は、一部の視聴者の皆さんから「やかんやなべのふたは、たたくものではない」と、NHKにおしかりの電話などをいただきました。小嶋くるみさんやバンドの人たちなど多くの人たちといっしょに、新しい発想で番組づくりをしましたが、違和感を感じた視聴者の方もいらしたようです。

小野 身近なものを楽器にして、歌ったりおどったり、体全体で音楽を楽しむことは、子どもを豊かにするだけでなく、創造性を養ううえで、これからますます必要になってくるように思います。

五十野 では私たちがNHKでやってきたことは、今でも新しい試みなんですね。

小野 創造性を育てる音楽や芸術作品は、時代をこえた価値があるように思います。もともと人間は、何もないところから、音楽や絵などを創造して、文化をきずいてきたのですから。

特に幼児期には、音楽や絵画、工作など芸術による教育によって、豊かな心を育て、個性、自主性、創造性を養う必要があると思います。

五十野 小野先生は詩集に『平成の万葉童謡集』と名付けましたが、どうしてですか。

小野 『万葉集』は450年ほどの間につくられた約4500首の和歌を、大伴家持が編集したといわれています。私の詩集に『万葉童謡集』と名付けたのは、明治の先覚者からはじまって、北原白秋、巽聖歌を経て長い時間をかけ、『万葉集』のようなスケールの大きな文化的価値の高い童謡集が出版されることを願ってのことです。

私も童謡や絵本を心の糧として大きくなりました。文化の継承と創造、そして発展という意味で長期的な視野に立って、童謡づくりを進めたいと思っています。童謡の創作活動に情

熱を燃やす先生方が「童謡をつくりましょう」と、来てくださったり、作曲家の森崎貴敏さんが作曲家の方を紹介してくださったりと、ありがたいことです。

幼稚園の創設者フレーベルの「子どものために生きよう」、「子どもの家」の創設者モンテッソーリの「子どもとともに生きよう」の精神で、世界の子どもたちが心から楽しめる童謡をつくっていきたいと思っております。